

「辞書に載せることば」の見つけ方

『三省堂国語辞典』編集委員

飯間 浩明

「載せたいことば」提案続々

一月に、『三省堂国語辞典』（『三國』）の第六版が刊行されました。その直後から、読者カードが続々と届いています。「辞書に載せてほしい身近なことば・用法」を提案する欄には、さまざまなおことばが記入されています。

たとえば、複数の人から提案されたことばとして、「KY」（空気が読めない）、「どんだけ」（IKKOさんが使った感動詞）などがあります。二〇〇七年に爆発的に流行したことばです。この先、定着するかもしれませんが、一時的な流行語で終わるおそれもあります。しばらくは要観察でしょう。

「フォッサマグナ」（本州の真ん中を南北に走る、地質の異なる線）や、「NAFTA」（ナ

フタ、北米自由貿易協定）などの項目を要望する声もあります。学校の社会科で教わることばです。こういった固有性の高い語を小型辞書がどれだけ取りこむべきかは、慎重に見きわめる必要があります。ただ、一般によく話題に上ると判断されれば、次回以降の版で載せることは考えられます。

ときには、当然載っていてもよさそうなことばが載っておらず、指摘を受けて痛恨に思うこともあります。それがどんなことばかは、ほかの辞書との競争もあるので、詳しくは秘密ですが、たとえば「お経きやう」がそうです。『三國』に限らず、「お経」は、多くの辞書には載っていません。「経きやう」を見ればすむことだからです。そうは言っても、現代では、「経」よりも「お経」のほうがふつうのことばです。『三

今回の辞書



『三省堂国語辞典 第六版』
三省堂／2008年

国』では、「お骨こつ」「お遍路」など、「お」をつけて使うことばを多く項目に立てています。「お経」も、そのひとつに入れてよかつたところですよ。今後の宿題になりました。

基本は新聞や雑誌の読破

読者から寄せられた「載せてほしいことば」は、ぜひ採用したいもの、すぐには採用が難しいものを含め、どれも貴重な情報です。しかし、当然のことですが、ことばを探す作業のほとんどの部分は、編集委員と編集部が責任を持って行わなければなりません。

では、私たちは、「辞書に載せることば」をどうやって見つけているのでしょうか。そのことをお話ししましょう。

一般に、日常生活の中で、「おや、このこ

とばは辞書に載っていない」と気づくことは、だれにでもあるはずで、とはいえ、そうした偶然の機会を待っているだけでは、辞書の改訂作業は進みません。意識して、目標の語数も決めて、「辞書にまだ載っておらず、しかも、辞書に載せるべきことば」を探さなければなりません。

探索の基本は、多くの新聞・雑誌・単行本などを、隅から隅まで一字も漏らさず読むことです。あわせて、テレビ・ラジオの放送を記録することも行います。インターネットもチェックしますが、信頼性に不安があるので、現在のところは補助的な手段です。

『三国』の初版から第四版までの編集主幹だった見坊豪紀は、片時も新聞や雑誌を手放さず、たえず辞書に載せる候補となることばを探していました。その生涯に、全部で一四五万枚に及ぶことばのカードを作成したことは有名です。見坊の後を引き継ぐ私たちも、同様の方法をとっています。個人の都合、新聞や雑誌などから、一か月にほぼ五〇〇例前後のペースで、「新しいことば」の用例を採集しています。

新しく載った「薄掛け」

実際に、ある週刊誌のことばを調べてみることにしましょう。まずは、表紙や広告も含

めて、全ページをなめるように読みます。その際、自分の知らなかったことばや、辞書に載っていないことばに、鉛筆などで印をつけておきます。最後まで読み終わったら、印を付した前後のことばを、そのままパソコンに入力します。私の場合、一冊の週刊誌を読む時、だいたい七〇例から一〇〇例ほどのことばを拾います。

たとえば、エッセーのページに「薄掛け」ということばが出てきました。このことばは、従来の『三国』には載っていません。それどころか、ほかの大きな辞書にも載っていません。となると、これは採集しておく必要があります。パソコンに「薄掛け」と入力しただけでは、あとで何のことばか分からなくなってしまうから、前後の文脈、出典、日付、ページなどの情報をあわせて記録します。

〈薄掛けの布団から出た足先が冷たくて目が覚める〉。(安野モヨコ「くいいじ」6『週刊文春』2006・10・5 p.74)

何日か後、スパーの折り込みちらしにも、この「薄掛け」が出てきました。また、以前の新聞記事にも使用例がありました。いずれも、同様の方法で記録しておきます。さらに、インターネットで検索すると、「薄掛け」の多数の例が出てきます。これらの例の存在か

ら、「薄掛け」は日常語でありながら、辞書に未登録だったと結論されます。

こうして、『三国』の第六版では、次のように「薄掛け」の項目が立てられました。

〈うすがけ「薄掛け」(名) うすい かけぶとん。(↑厚掛け)〉

出来上がってみれば、拍子抜けするほど簡単な説明ですが、「薄掛け」という一語をすくい上げて意味を確定するまでには、多くの時間と労力がかかっているのです。

それぞれの辞書には性格の違いがあり、どの辞書もこのようにして作られているわけではありません。『三国』の場合は、現代のことばの実態をきめ細かく写し取ることを目標にしています。それで、新聞・雑誌・放送などから使用例を採集する作業が、とりわけ重要になります。私たちにとって、苦しくも楽しい作業です。

いまま ひろあき 一九六七年、香川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、同大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、早稲田大学非常勤講師。日本語学者。著書『遊ぶ日本語不思議な日本語』(岩波アクティブ新書)。